

受難節第2主日礼拝説教「神の国はここにあり」予稿

日本基督教団石神井教会 2017年3月12日

【旧約聖書日課】イザヤ書 35章1～10節

- 1 荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ
砂漠よ、喜び、花を咲かせよ、野ばらの花を一面に咲かせよ。
- 2 花を咲かせ、大いに喜んで、声をあげよ。
砂漠はレバノンの栄光を与えられ、カルメルとシャロンの輝きに飾られる。
人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る。
- 3 弱った手に力を込め、よるめく膝を強くせよ。
- 4 心おののく人々に言え。
「雄々しくあれ、恐れるな。見よ、あなたたちの神を。
敵を打ち、悪に報いる神が来られる。神は来て、あなたたちを救われる。」
- 5 そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。
- 6 そのとき、歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。口の利けなかった人が喜び歌う。
荒れ野に水が湧き出で、荒地に川が流れる。
- 7 熱した砂地は湖となり、乾いた地は水の湧くところとなる。
山犬がうずくまるところは、葦やバビルスの茂るところとなる。
- 8 そこに大路が敷かれる。
その道は聖なる道と呼ばれ、汚れた者がその道を通ることはない。
主御自身がその民に先立って歩まれ、愚か者がそこに迷い入ることはない。
- 9 そこに、獅子はおらず、獣が上って来て襲いかかることもない。
解き放たれた人々がそこを進み
- 10 主に贖われた人々は帰って来る。
とこしへの喜びを先頭に立てて、喜び歌いつつシオンに帰り着く。
喜びと楽しみが彼らを迎え、嘆きと悲しみは逃げ去る。

【使徒書日課】ヨハネの手紙一 3章1～10節

¹御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです。世がわたしたちを知らないのは、御父を知らなかったからです。²愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。³御子にこの望みをかけている人は皆、御子が清いように、自分を清めます。⁴罪を犯す者は皆、法にも背くのです。罪とは、法に背くことです。⁵あなたがたも知っているように、御子は罪を除くために現れました。御子には罪がありません。⁶御子の内にいつもいる人は皆、罪を犯しません。罪を犯す者は皆、御子を見たこともなく、知ってもいません。⁷子たちよ、だれにも惑わされないようにしなさい。義を行う者は、御子と同じように、正しい人です。⁸罪を犯す者は悪魔に属します。悪魔は初めから罪を犯しているからです。悪魔の働きを滅ぼすためにこそ、神の子が現れたのです。⁹神から生まれた人は皆、罪を犯しません。神の種がこの人の内にいつもあるからです。この人は神から生まれたので、罪を犯すことができません。¹⁰神の子たちと悪魔の子たちの区別は明らかです。正しい生活をしない者は皆、神に属していません。自分の兄弟を愛さない者も同様です。

【福音書日課】マタイによる福音書 12章22～32節

²²そのとき、悪霊に取りつかれた目が見えず口の利けない人が、イエスのところに連れられて来て、イエスがいやされると、ものが言え、目が見えるようになった。²³群衆は皆驚いて、「この人はダビデの子ではないだろうか」と言った。²⁴しかし、ファリサイ派の人々はこれを聞き、「悪霊の頭ベルゼブルの力によらなければ、この者は悪霊を追い出せはしない」と言った。²⁵イエスは、彼らの考えを見抜いて言われた。「どんな国でも内輪で争えば、荒れ果ててしまい、どんな町でも家でも、内輪で争えば成り立って行かない。²⁶サタンがサタンを追い出せば、それは内輪もめだ。そんなふうでは、どうしてその国が成り立って行くだろうか。²⁷わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出すのなら、あなたたちの仲間は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたたちを裁く者となる。²⁸しかし、わたしが神の霊で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。²⁹また、まず強い人を縛り上げなければ、どうしてその家に押し入って、家財道具を奪い取ることが出来るだろうか。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。³⁰わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている。³¹だから、言うておく。人が犯す罪や冒瀆は、どんなものでも赦されるが、「霊」に対する冒瀆は赦されない。³²人の子に言い逆らう者は赦される。しかし、聖霊に言い逆らう者は、この世でも後の世でも赦されることがない。」

主イエスと一緒に集める

受難節の祈りの期節を共に歩ませていただいています。この期節に、普段の礼拝や集会に加えて、週の半ばの水曜日の夕べに、特別な祈りのときを設けさせていただいています。30分ほどの短時間ですが、この期節のために整えられた祈りの言葉と、御言葉の黙想を、分かち合わせていただいているのです。先週の水曜日夕べの集まりには、マタイ福音書6章の「施し、祈り、断食」について教えられている御言葉が与えられていました。「施し、祈り、断食」は、ユダヤ人から受け継いだキリスト者の宗教実践です。二千年前の主イエスの時代ではなく、現代の社会に生きるわたしたちにとって、その教えがどのような意味を持つのか、あらためて心に留めなおす機会となりました。主イエスがこうするようにと明らかに教えになられている御言葉を、わたしたちは、どれだけ知らぬふりしていることか。知っていても、上手に言い訳をして、実のところ主イエスの教えにひそかに内心で言い逆らっていることが、何と多いことか。わたしたちのキリスト者としての根本的な姿勢を、あらためて問われているように思いました。

今日の福音書の御言葉の中で、主イエスは、「わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている」とお告げになられています。受難節の期節に、わたしたちは、主イエスがご自分のもとにすべての人々をお集めになられようとしていることを心に留めています。教会は、この期節に、来るイースターに洗礼を受けることを願う志願者と共に歩みます。キリストと結ばれるしるしとして洗礼の恵みにあずかり、教会の群れに加えられるのは、主イエスが、ご自身のもとにわたしたち皆をお集めになるとおっしゃられるからです。キリストが「わたしは集めない」とおっしゃられていたのであれば、教会は生まれなかったでしょう。しかし、キリストは「集める」とおっしゃられて、事実ご自分のもとに弟子たちをお集めになられたのでした。だからこそ、わたしたちは、教会に集められた者として、主がお集めになろうとしているすべての人を集めることに心を砕くのです。教会の営みへと集められ、洗礼によって確かな交わりに加えられるようにと、また、洗礼の恵みにあずかりながら教会の交わりの集まりから離れてしまっている人を再び集め、迎え入れようと、祈り願う。

しかし、それをわたしたちは、何か義務を果たしたり、ノルマを達成しようとして、行うものではありません。組織拡大や教勢維持のためにするのでもありません。キリストがご自身のもとに人をお集めくださる、そのときに起こる驚くべきことを知っているのも、驚くべき神の御業が現実となっていることを知っているのも、わたしたちは、そうしないではいられないのです。「目が見えなかった者」の目が開かれ、「口の利けなかった者」が喜び歌うようになる。「耳の聞こえなかった者」の耳が開かれ、「歩けなかった者」が躍り上がるようになる。預言者イザヤが神の救いの御業として語っていたことが、主イエスのもとに集められた人々の間で、まさに現実になっている。驚くべき出来事が、そこに集められた人々の間で起こっている。神の御業のご支配が、神の国が、まさにここに始まっている。そのことを、わたしたちも、目の当たりにさせられているのです

驚くべきこと

主イエスは、悪霊に取りつかれて目が見えず口が利けない人を、いやされました。ここに描かれている人だけでなく、主イエスが大勢の人の病気をいやされたと、福音書は繰り返し伝えていています。実際、主イエスは、病気をいやされたのだと思います。病気の人を奇跡的にいやされたということであれば、目撃した人はだれでも驚かないではいられなかったでしょう。福音書も、**群衆は皆驚いた**、と伝えていています。けれども、それは、ただ単に病気をいやすという奇跡に驚いた、ということではなかったと思います。それは、イザヤが告げているように、神がおいでになられている、神がそこにお立ちになられて御業をなされている、神が自分たちの前に先立ち行こうとしてくださっている、そのことに気づかないではいられなくなった驚きだったのではないのでしょうか。

わたしたちが教会という群れに連なって共に歩むのは、主イエスがこの群れの先頭に立って歩んでくださっているからです。この群れの集まりから外れないようについて来なさいと、あの弟子たちに対するように、わたしたちにも主イエスが呼びかけてくださっているからです。わたしたちは、二千年のときを超えて一つの教会という群れに連なり、その呼びかけに答えているのです。ここで、わたしたちは、今も先頭に立ってくださる主イエスに導かれているのです。そして、主イエスが導いてくださっているこの集まりの中でこそ、わたしたちは、神がおいでくださっていることに気づかされる。神がここにお立ちになられて御業をなされていることに、気づかされる。神こそが、まことの命に至る道を先立ち進んでくださり、道を拓いてくださっていることに、気づかされる。そのことを、わたしたちがなかなか気づくことができないときにも、主イエスは、先頭に立って、わたしたちを導いてくださっているのです。

わたしたちが、この群れの集まりの中で、教会の営みの中で、何よりも驚かされるのは、今まで神の恵みを見ようともしていなかった人の目が開かれて、神の恵みをはっきりと見るようになるときではないのでしょうか。今まで神の御声を聞こうとしていなかった人が、耳を開かれて、神の御声をはっきりと聞き取るようになるときではないのでしょうか。人生の歩みが定まらずにいた人が、神の恵みに生かされる人生を踊り上がりならば歩むようになるとき、神の御業を喜ぶことを知らなかった者が、喜びの讃美を歌うようになるとき、教会の群れの中でそのようなことが事実起こるとき、わたしたちは、驚かないではいられないのではないのでしょうか。

だから、一人の人が洗礼の恵みにあずかるようにと導かれることは、驚きなのです。驚かないではいられない神の御業が一人の人の人生の中で起こっていることを、わたしたちは、洗礼という教会に託された恵みの営みの中で、共に憶えるのです。今も、そのような御業が現れる器を、洗礼志願者として、わたしたちは与えられているのです。どうして驚かないでいられるのでしょうか。どうして、そのことを目撃し、立ち合い、共に歩むことが許されているわたしたちが、驚きをもって受けとめないでいてよいのでしょうか。

神の国は来ている！

主イエスが「わたしが神の霊で悪霊を追い出しているのであれば、神の国は、あなたたちのところに来ているのだ」とおっしゃられたとおりのことが教会の交わりの中で起こっているのです。もちろん、そうおっしゃられなくても、主イエスの前で目が見えない者が見えるようになり、口の利けない者が語り始めたのを見て、神の御業の現実を認め、驚きをもって受けとめた人たちはいたのです。

ところが、そうは受けとめなかった者たちもいました。主イエスのもとに集められてきた人たちが、悪霊を追い出していただいて、見えなかったのに神の御業が見えるようになり、聞こえなかったのに神の御声が聞こえるようになり、神の恵みに生かされる確かな人生の足取りを手に入れ、神の御業を喜び歌う者とされていく。その事実を見ても、醒めた目で見るばかりの人たちがいたのです。むしろ、主イエスがおいでになられたことで始まった神の御業の現実に、難癖をつけ始める者さえいた。「悪霊の頭ベルゼブルの力によらなければ、この者は悪霊を追い出せはしない」と言うのです。

そのようなことを言い出したのはファリサイ派の人々だと、福音書が物語っているからといって、わたしたちは、胸を撫でおろすことができるでしょうか。主イエスが彼らの考えを見抜いて、言葉が続けられたというのは、ここに伝えられている主イエスの教えが、弟子たちにも聞かせておくべき言葉だったからに違いないのです。わたしたちこそ、このファリサイ派の人々のようなことを、教会の営みの中でも心の内に抱き、陰で言い出しかねない者なのかもしれないのです。

だからこそ、主イエスはここで、最後に言われたのです。「だから、言っておく。人が犯す罪や冒瀆は、どんなものでも赦されるが、霊に対する冒瀆は赦されない。人の子に言い逆らう者は赦される。しかし、聖霊に言い逆らう者は、この世でも後の世でも赦されることがない」。主イエスは、ファリサイ派の人々を断罪なさっているのでしょうか。「お前たちは赦されない」とお裁きになられ、ご自分のもとから追い払おうとなさっているのでしょうか。決してそうではないでしょう。主イエスは、ファリサイ派の人々を前にして、お悲しみになられているのです。わたしたちの罪深い心の内をご覧になられて、深くお嘆きになられているのです。「どうしてお前たちは、そんなことを考えるのか」と、主イエスは、ご自分に言い逆らい、難癖をつける者たちを前にして、なお、心痛めていらっしやる。そういう言葉なのではないでしょうか。

主イエスは、すべての者を神の御業の世界、神の国へとお集めくださるために、おいでくださったのです。わたしたち皆をお集めくださっているのです。誰一人散らされないように、誰一人神ならぬものを神とすることがないように、そのために、主は、ご自分の命をも厭われないのです。

「神の国は、すでにあなたたちのところに来ている」。その現実を見るようにと、わたしたちは、主イエスのお集めくださる教会に招かれてきたのです。ここで、わたしたちは、お互いの内に、「神の国」にすでに生き始めている「神の子」の現実を見るようにと、促されているのです。